



宇佐高田地域との不思議な縁

豊後高田市医師会 伊藤 達郎

現在、豊後高田市にある玄々堂高田病院で内科／循環器内科医として勤務しています。

長崎県島原市で生まれ育ち、長崎大学に進学し、長兄が他県で就職していたこともあり、そのまま長崎県内で医師として一生過ごすものと思っていました。

大学卒業後、長崎大学第3内科（現循環器内科）に入局後に運命の歯車が回り出します。第1の歯車は、長兄が島原市の実家に戻ったことです。束縛が外れ、研修医終了後に、大阪府にある国立循環器病センターレジデントとして、念願の他県勤務となりました。レジデント3年間終了後、更に2年CCUシニアレジデントで残り、長崎に帰るつもりはなかったのですが、ここで第2の歯車が回ります。父が急死し、急遽長崎に戻らざるを得なくなったのです。しかし貧乏レジデントには引っ越し費用すらなく、医局に相談し、心臓カテーテル検査のカテラボを立ち上げる宇佐高田医師会病院が赴任費用を負担するから1年半で立ち上げて長崎に戻れと指示されました。こうして宇佐高田地域との最初の縁が生まれました。赴任した平成9年当時は別府から小倉間で緊急心臓カテーテル治療を行う施設がなく、2人の循環器医で24時間対応し、コメディカルスタッフの協力もあり、無事にカテラボも軌道に乗りました。ところが、後任が決まらず、結局、宇佐高田医師会病院で4年ほど勤務し、長崎県内の病院や大学に戻りました。第3の歯車が回ったのは、医師として20年が過ぎた時です。以前、同期と500例急性心筋梗塞患者を救えば自分達の使命としては十分だろうと話していたことを思い出し、十分お釣りがくる症例数でしたので、心臓リハビリテーションを含む慢性期治療をやろうと考えたことです。当初は長崎県内で転勤先を探しましたが、カテーテル治療医としての業務を希望する病院が多く、最終的に私の心臓病慢性期治療のビジョンを受け入れて頂いた現在の病院へ勤務することになりました。こうして宇佐高田地域2回目の勤務となり、何か見えない不思議な力や縁が宇佐高田地域に戻そうとしているようにも感じました。

不思議な縁の続きとして、赴任後に詳しく知ったのですが、江戸時代に豊後高田市や旧真玉町、宇佐市長洲や橋津、旧安心院町の一部が島原藩の飛び地であり、島原市と宇佐高田地域は、古くから交流があったようで、宇佐神宮の祭事にも島原藩が関与していたこともあったようです。母方の実家は代々商家であったこともあり、もしかしたら先祖は宇佐高田の地を訪れていたのかもしれない。その母も術後寝たきり状態になった際、宇佐高田医師会病院でリハビリをし、車を運転できるまでに回復しました。いろいろなエピソードの一つが欠けても、現在の地での勤務はなかったと思います。宇佐高田地域との不思議な縁を感じながら勤務を続けている日々です。



地域医療

中津市医師会 盛満人之

大堀脳神経クリニック院長の盛満人之と申します。令和元年9月に診療再開にあたり中津に参りました。クリニックでの診療に加え、中津脳神経外科での血管内治療も必要に応じて任されています。弘仁会森本理事長よりクリニック再開のお話を頂いた時、私は種子島に赴任していました。鹿児島大学脳神経外科が撤退したため脳神経外科医が不在となり、急患は鹿児島市内へ自衛隊の飛行機での搬送となります。天候不良により飛行機が飛べない場合、なすすべも無く命を落とすといった、あつてはならない医療体制でした。その現状を種子島の後輩医師から聞き、考えたあげく単身で種子島に行くことを決めました。「福岡県在住医師種子島脳外科赴任決まる」と鹿児島の新聞に載ったことには驚きましたが、脳外科医不在がどれほど深刻な問題であったかを物語っていますし、そこへ赴くことの責任の重大さを痛感したことを覚えています。

約4年間の種子島赴任でしたが、当初、地域性やこれまでの島民にとっての病院の在り方に戸惑いを感じたものです。患者さんに鹿児島市内まで行く負担を無くし、島で受け入れから治療までを可能にすることを目標に勇んで種子島に赴きましたが実際は違いました。

これまでの脳外科の役割は、応急処置をして手術は鹿児島市内ですするという橋渡しの存在だったようです。患者さんにムンテラを行い手術の予定を立てようとする、「ちゃんとした病院（医師？）で診てもらいたい」という思いもよらない答えが返ってくるのです。一瞬時が止まりますが、そこは大人の対応（？）で紹介状を書いたものです（笑）。

日々の診療で少しずつ島民の信頼を得るしかないという思いで過ごし徐々に手術を任せて頂けるようになり、微力ながら島に貢献できたのではないかと・・・思っています（笑）。

かつて、急患対応・手術に明け暮れていた私ですが、この島での経験で地域医療の本質を少しは理解・習得できたのではないかと感じています。

中津での生活も2年目に突入しましたが、地域性を理解し、地域に馴染み、少しでも中津市の方々に受け入れて頂けるよう精進して参りたいと思います。

医師会の先生方におかれましては、他県出身の新参者を快く受け入れて頂き感謝申し上げます。今後ともよろしくお願いいたします。



開業2年を振り返り

中津市医師会 大谷 将之

中津市で泌尿器科・内科の「おおたにクリニック」を開業しており、今月で開院3年目に入りました。

当院の理念は、「排泄に困らない社会の実現」であり、スタッフには「利他の心」に基づき行動することを促しています。

開院してからの2年間を振り返ってみたいと思います。

開院する前は、事業計画通りに患者さんは来てくれるのだろうか、過剰投資になっていないだろうかとお金のことばかりを心配していました。

開院してみると、心配事はお金ではなく、「人」でした。開院前日に事務職員が1名退職し、事務職員1名と看護師2名でスタートを切りました。開院3か月後には看護師2名が退職し、危機的な状況となりました（退職原因はスタッフ間の人間関係）。この苦境を何とか乗り切り、現在は事務職員5名、看護師3名、検査技師1名で、患者さんからの評判が良く、私の一番の財産となっております。

来院患者数は順調に増加していましたが、コロナウイルス感染症流行の影響で、令和2年3月より減少に転じました。不安が募りましたが、コロナ禍でも来院している患者さんの疾患、年齢・性別、保険のタイプ、住所、来院動機（HP、看板など）などを分析し、前向きに対策を考えました。泌尿器科疾患（性病、尿路感染、排尿障害など）の患者数はほとんど減少していなかったことから泌尿器科診療に注力しました。当院は遠方からの来院患者さんが多く、遠方の患者さんの受診控えが目立っていたことからオンライン診療を導入しました。内科に関しては、かかりつけ医として24時間の対応を行うことにし、在宅医療への参入準備も現在行っています。

感染対策に関しては、オゾン発生装置の設置、二酸化炭素モニターの活用による換気、待合室の人数制限（番号札配布による指定席化、フィジカルディスタンス保持）、入室時アルコール消毒と検温、マスク着用義務化、発熱・呼吸器症状患者の診察を隔離室と車中で行うなどを行い、ホームページに現在行っている感染対策を紹介し、未来院の人に安心して来院していただけるようにしています。

昨年5月に中津市医師会理事を拝命しました。大分県では、昨年末より大分市や別府市を中心にコロナウイルス感染症の流行が認められており、同地域の医師会の先生方に於かれましては、大変な日々をお過ごしかと思います。個々で解決できないことは一人で悩まず、医師会を活用し、この危機を乗り越えていきましょう。

リレー随筆



子どもと仲良くなるために

中津市医師会 伊藤 創太郎

はじめまして、中津市の井上小児科医院副院長の伊藤創太郎と申します。福岡大学卒、福岡大学小児科学教室出身です。2008年に初めて中津市民病院小児科に来ました。医局人事などで2020年3月まで中津市民病院に4回異動し、計5年半勤務しました。今年4月より井上小児科医院で勤務しています。小児科医となり半分開りの期間は中津で過ごしました。故郷は長崎ですが、中津も同じくらい好きな町です。これからも中津の子どもたちのために頑張りたいと思っています。

さて、小児科では子どもと仲良くなるためにアニメやキャラクターものをよく使います。アンパンマン、ポケモン、ドラえもん、ディズニーが人気ですが、最近は話題の「鬼滅の刃」が圧倒的な人気です。私も漫画・アニメ・映画をみましたが、登場人物の感情や背景を丁寧に描いていて、ぐっと感情移入してしまう物語です。診察室と待合室にキャラクターのぬいぐるみと1000ピースのジグソーパズルを置いていますが、子どもから親までかぶりつきで見してくれます。子どもたちが、「あつ炭治郎だ!」、「ねじゅこ」と言っているのを見ているだけでも楽しくなります。「一番好きな柱は?」とか「映画みた?」と子どもたちと仲良くなる話題でとても役立っています。親も一緒に会話に入るので打ち解けて、困り事なども話しやすくなるようです。1番いい事は診察時になかなか深呼吸をしてくれない子に「水の呼吸だよ」というとしっかり深呼吸を、注射で嫌がって暴れている子に「全集中!」というピタッと止まって我慢、と台詞ひとつでこちらの意図がわかってもらえることです。たくさんの漫画やアニメは見てきましたが、「鬼滅の刃」ほど小さい子から大人まで影響を与えた作品はなかったと思います。改めて漫画やアニメの力を実感しました。これからも子どもたちと仲良くするために情報収集を頑張ろうと思います。まだ「鬼滅」を知らない先生方、騙されたと思ってみてください。きっと映画もみたくなると思います。

最後に、今年3月に中津に映画館ができました。8スクリーンあるりっぱなシネコンです。イオンの駐車場からすぐ入り口なので映画をサクッと楽しめます。ぜひ中津にも足を運んで映画を楽しんでいただけたらと思います。



忍 冬 (スイカズラ)

中津市医師会 井 上 登 生

2019年5月から2020年9月、昭和～平成時代に終わりを告げるかのように、中津市の小児医療を支え続けてきた小児科医3人が亡くなった。1993年、地域に根ざした小児医療供給体制作りを夢のひとつとして、私が中津市に帰った時からすでに地域で働き続けていた3人だった。

今回、リレー随筆の執筆依頼が今年で開業医生活が30年となる私になぜか飛び込んできた。若く、これからの地域医療を支えていくべき医師の皆様の投稿欄に、僭越ながら仲間入りさせてもらうことにした。

昭和22年の制定から一度も見直されることがなかった児童福祉法を、第1条の理念から抜本改正した児童福祉法等の一部を改正する法律（平成28年法律第63号）の策定を審議する厚生労働省社会保障審議会児童部会専門委員会の委員として、2014年9月からほとんど毎月（多い時は週3回）継続してきた東京通い。それがひと段落した矢先の新型コロナ関係の中津市医師会発熱外来担当理事の職務、亡くなっていった先輩医師の仕事の継続支援等、今年64歳になる私にとっては少しばかり荷が重すぎる日々が続いていた。

そんな中、8月の終わりの小児救急準夜勤務中に、11年ぶりに大腸憩室辺縁動脈性出血が再発し緊急入院となった。遠のく意識の中、私を気にかけてくれていた亡くなった先輩小児科医の皆さんの顔が走馬灯のように見えた後、ぐわっと背中を押されるように意識が戻り、救急室の天井と周りでテキパキと処置をしている医師、看護師の皆さんが目に入った。又々の生還である。

忍冬、冬に青い葉を残したまま冬を越すことからこの名がある、初夏（4～5月）に白い可憐な花をつける草本である。亡くなった先輩小児科医と年に2回の飲食会の時、小児科医の人生が他科の先生より短いこと、働きづめで突然この世を去っていくことが多い小児科医のことを考えていて思いついた花である。

新型コロナ禍後の新しい小児科医のあり方が少しでも夢のある仕事であることを祈りながら。

急に冷え込んできた中秋の日に



乳鉢

試練



中津市医師会 梶原 慎

はじめまして、梶原病院理事長兼病院長の梶原慎と申します。

私は平成28年4月に当院に赴任し、平成30年4月より現職に就任いたしました。

当院は、私の祖父が昭和44年に設立し約50年間中津市の地域医療に携わってまいりました。しかし平成23年の東日本大震災を契機に行われた耐震改修促進法改正にて、当院は現建物では診療困難との通知を国より受けました。私が赴任する少し前にこの通知を受け、さらに同時期に病院の創設者である祖父が他界しました。閉院するか売却するかまたは何か対策を行い梶原病院を続けていくかの選択に迫られておりました。当院で仕事をしていくなかで、スタッフの協力やまわりの先生方の御指導、また地域の住民の方の想いに触れていくうちに、このまま梶原病院を続け、突き進みたいという思いが生まれました。

そして現職に就任し、病院新築を行い梶原病院として診療を継続する決心を致しました。医師としても経営者としても未熟なまま就任することに不安はありましたが周りの方の協力によりなんとか継続できております。新病院の建設が決定すると、次は東京オリンピックによる建築費用の高騰化や消費税増税などの問題に直面し、当初の計画よりダウンサイジングを行い病床数も削減することとなりました。

様々な問題もありましたが今年の4月より建設を開始することができ、新病院は令和3年5月に開院予定です。

建設中のいまでも、全世界に未曾有の危機をもたらしているSARS-CoV-2、特別警報級の台風などの様々な困難が続いております。何度も心が折れそうになりますが、そんな時は私の好きなドラマ日曜劇場『仁-JIN-』に何度も出てくる『神は乗り越えられる試練しか与えない』という言葉思い出し、一歩ずつ進んでおります。

これから先も様々な困難が待ち受けていると思いますが、突き進む決心をした以上、スタッフや地域医師会の先生方の協力をいただきながら、地域医療の発展に貢献させていただく所存です。

これからも精進して参りますので、どうぞ宜しくお願い致します。

リレー随筆



待合室，どんな本置いてますか？

中津市医師会 進 武一郎

中津市で耳鼻咽喉科を開業しています進 武一郎です。タケイチロウではなくブイチロウと読みます。祖父，父のあとを継承し2019年9月に開業いたしました。よろしくお願いいたします。

実は中津に住むのは31年ぶりです。中学で他県に進学し，2年間浪人の末，久留米大学に入学しました。その後同大学耳鼻咽喉科に入局し昨年7月の退局まで23年間久留米市在住であったため，人生の半分以上は福岡県民です。今後はずっと中津市民予定ですので，昔を思い出しながら少しずつ大分県民になっていきたいと思います。

さて，今回，クリニックを建て替え開業したのですが，その際，待合室の本は何を置こう？とけっこう悩みました。雑誌や漫画をたくさん置きたいと考えていたのですが，いざ置くとなると何を置けばいいのかわかりませんでした。最初は自分の好きな雑誌を中心に置いていましたが，この1年，様々な人の意見を参考にしたり，ネットで情報を集めたりと試行錯誤を重ね，現ラインナップとなりました。参考になるかわかりませんがご紹介いたします。

- ・主婦層向け→VERY, STORY (ファッション誌，本棚が華やぎます)，オレンジページ，エッセ (料理中心，安定した人気です)，LDK (モノ批評誌，かなりシビアな批評，本屋さん推薦)
- ・週刊誌→週刊文春 (みんなご存じ文春砲)，女性自身 (やっぱり女性誌，絶対必要です)，AERA (ニュース週刊誌)
- ・男性向けファッション誌→BEGIN (大人の男ファッション誌)
- ・シニア女性向け→ゆうゆう (50歳からの女性誌，年金などの話多めです，これも本屋さん推薦)
- ・スポーツ系雑誌→月刊ゴルフダイジェスト (やっぱりゴルフ！根強い人気)，Number (スポーツを幅広く，写真もきれいです)
- ・旅系雑誌→じゃらん九州版 (個人的には九州ウォー〇ーより好きです)

というようなラインナップです。いつも表紙の折曲がり具合を見て，人気度を推測しています。ついでに漫画も少し紹介しておきます。

超人気系→鬼滅の刃，キングダム，ワンピース スポーツ系→はじめの一步，スラムダンク 名作系→ドラゴンボール，マスターキートン，その他色々をローテーションで並べています。

今も試行錯誤を繰り返していますが，まだまだです。今後も最高のラインナップを目指し日々精進していきたいと思います。

皆さま，待合室，どんな本置いてますか？何かいい本や雑誌があれば是非教えてください。



乳鉢

マラソン



中津市医師会 永松 弘 孝

中津第一病院泌尿器科の永松弘孝と申します。私は大学入学から当院へ赴任するまで、広島県内にずっと在住しておりました。4年前から現在の病院に勤務しております。随筆リレーとのことであり、何について書こうかと思いましたが、私の趣味でありますマラソンについて書こうと思います。

私は30歳を過ぎたころ、広島県北の庄原市にある庄原赤十字病院に勤務しておりました。冬になると雪が多量につき、そもそもの運動不足、不摂生な生活、雪による冬眠生活（単に寒いから動かないだけ、ただし冬を越すため、本能的に餌は多量摂取）のため、BMIは上昇し続けておりました。当時付き合っていた彼女（＝今の嫁）が、見かねてジョギングシューズを買ってくれたのと、所属していたジムの優待券をくれたので、初めてルームランナーで5Km走りました。時速8Kmほどのゆっくりしたスピードだったのですが、とてもきつかったのを覚えております。ただ、走り終わった後の解放感、達成感、食事、アルコールの美味しさ、走った自分に心酔？など、色々な要素が奇跡的に噛み合ったためか、その後、自主的にスポーツジムに入会し、週に2-3回走り続けました。おかげで、半年もすると体重10Kg減、体脂肪率も12%ほどまで低下しました。2年もすると、体力がそれなりについてきたのか、10Kmを47分ほどで走れるようになりました。調子に乗ってきて、嫁とフルマラソンに参加しようとの話になり、兵庫県の福知山マラソンに出場することになりました。実はこの時まで10Km以上走ったことがなく、ネットで10Kmのタイムをフルマラソンでのタイムに換算すると、3時間57分だったので、これに合わせて、今思えばかなり無謀なペースで走り出しました。20Kmを1時間50分で通過したのですが、このあたりから乳酸がたまり、下半身が鉛のように重くなってきました。さらに30Kmを2時間50分で通過しましたが、ここで完全に自走不能に近いポンコツの足となりました。ここからは歩行、散歩となり、途中で嫁にもいつの間にか抜かれておりました。何とか完走することはできたのですが、最後の10Kmは歩いているだけなのに、地獄のようにきつかったです。このマラソン参加を最後に、その後、大学病院、現在の病院へ赴任し、多忙のため現在では走ることもなくなってしまいました。最近、痛風発作を頻回にきたしており、もう一度あの頃のやる気を奮い立たせようとしている今日この頃です。



ラグビーワールドカップ2019

中津市医師会 藤吉直樹

大分県中津市で開業させていただいております、藤吉産婦人科の藤吉直樹です。福岡大学卒、久留米大学産科婦人科学教室出身です。生前の父は、久留米市で藤吉産婦人科医院を開業しており、3代目の思いを継いで同じ屋号を使っております。今年、中津での生活も5年目を迎えます。

中津市は大分県の中でも出生率が1.95と非常に高いのが特徴です。しかし、分娩を取り扱う施設は中津市民病院と当院しかなく、福岡県側も行橋市までないような状況です。当初は開業に際し不安がありましたが、ありがたいことに、中津市医師会や大分県産婦人科医会の先生方にあたたかく歓迎していただき、今では安心して診療させていただいております。

さて、昨年はラグビーワールドカップ2019が開催され、日本中で大変な盛り上がりを見せました。大分市も開催都市の一つで、予選3試合、準々決勝2試合がありました。そのうち3試合を家族全員で観戦しましたが、やはりその迫力（選手だけでなく観客もデカイ）や「一生に一度感」は初めて経験するもので、貴重な体験でした。私は中津ラグビースクールという、ちびっこラグビーチームのコーチをさせていただいており、我が子3人ともスクールで元気に頑張っています。ワールドカップの影響は大きく、入部希望者が多数押しかけ、部員が一気に2倍近くになりました。新天地で生活する中で、診療以外でも地域の方々とつながりを持てたことがとても嬉しく、受け入れていただいた事に大変感謝しております。

最後に、敢えてSARS-CoV-2には触れませんが、いろんな困難な状況下でも、この地域で産婦人科開業医として自分にできることを考え、実行していけるよう日々精進して参りますので、今後ともどうぞ宜しくお願い致します。



フェンシングと私

宇佐市医師会 和田 浩 治

今回、兄から随筆リレーが回ってきて、何について書こうかと迷いましたが、私が大学生時代に励んでいたスポーツについて書きたいと思います。

高校生までは、野球やサッカーをしていましたが、大学入学後は何か新しいスポーツをやりたいとの思いがあり、たまたま選んだのがフェンシングでした。今では、北京オリンピックで個人銀メダルを獲得した大田雄貴選手（現日本フェンシング協会会長）の活躍により、認知度が高くなりましたが、私が大学に入学した25年前は超マイナーな競技（今でも？）で、一般的には「お面と全身白タイツを着けて、突っつき合うへんてこな競技」のイメージが強く、入部者の少ない競技でした。実際、私が入部した時も部員は10人にも満たず、全国の医学部サークルでフェンシング部があるのは、我が母校の福岡大学と岩手医科大学の2校のみ！でした。フェンシングは、ヨーロッパ中世に発達した騎士の剣術が19世紀末より競技化されたスポーツで、競技用語はフランス語です。ルールを簡単に説明すると、相手の体に先に剣を突いたり、斬ったりすると剣の先端、もしくは剣身より電流が流れてブザーがなり、自らのポイントとなります。「フルーレ」「エペ」「サーブル」の3種目があり、使用する剣やルールがそれぞれ異なります。「フルーレ」は突きの有効面が胴体のみ、「エペ」は突きの有効面が全身、「サーブル」は突きだけでなく斬りも有効で、有効面は上半身全てとなります。基本動作は、前後に一步步移動もしくは飛ぶ、腕を伸ばして突く、剣をはらう、剣をはらったあとに突き返す、剣を前に突き出して突進する、剣を回してかわす、などです。この文章だけでは、なかなか競技の面白さが伝わりにくいのですが、相手より一瞬でも先に剣で突いたり、斬った時にブザーが鳴ることがおもしろく、少しでも上手くなろうと練習に励みました。マイナー競技なので、サークル内には経験者および指導者はおらず、社会人や医学部以外の大学生、時には高校生との試合では、負けることの方が多かったのですが、1ポイントでも多く取れるとうれしいものでした。卒業後はフェンシングをやる機会はなくなりましたが、テレビでフェンシングの大会が中継されていると、昔を懐かしんで必ず観戦しています。近年の日本人選手のレベルは高く、来年に延期となった東京オリンピックではメダルを期待されている日本代表を応援したいと思います。



乳鉢

思い出話



宇佐市医師会 和田 純 治

文章など書く機会がないので拙い文になりますが、ご了承くださいねと思います。

今思い浮かぶ事といえば、コロナ感染拡大の暗い話ばかりなので、私の個人的思い出話に勝手にすり替えました。

映画館との出会いについて話します。私の映画館体験は比較的遅く、小倉で予備校生活を過ごした18歳からであったと記憶している。勿論学校の体育館で全校生で鑑賞した教育映画的なものを除いてだが。その理由は小学校～高校生時を映画館のない宇佐市で過ごしたためや、あの時代の社会的風潮で、映画館は大人同伴が必須との制限があり、それでも強行突破する場合は夏休み期間中などに親に内緒で友達同士で大分市まで電車で繰り出さないといけない、物理的に高いハードルと背徳感があるため、なかなかできなかったのであろうと思われる。

今思えば幼かったなあと笑い話であるが、当時の自分は映画館は不良が集まるところなどというfake newsで洗脳されていた。その反動が一番最初に見た映画はデヴィッド・リンチ監督のWild at Heartという不良映画であった。カンヌ映画祭パルムドールを受賞したとのことで選んだが、暴力的で正直よくわからない印象であった。

その後東京の大学に進学してからミニシアターを含めた数多くの映画館に通い詰め、様々な映画を鑑賞することで一気に映画経験が広がった。1990年代の東京の映画館事情はミニシアター全盛期で、銀座の並木座・シネパトス、池袋の文芸座・アクトセイゲイシアター、高田馬場の早稲田松竹・アクトミニシアター、飯田橋のギンレイホール、渋谷のユーロスペース・アップリンク・シネマライズ、新宿の武蔵野館・テアトルなど暇さえあれば通っていた。

入替なしで2-3本立て低価格だったので小遣いを工面し、朝から晩まで授業もそっちのけで入り浸っていた。そのため大学の成績は常に底辺組であった。

日本映画では小津・成瀬・溝口監督作品・ヤクザ映画、外国映画ではフランスヌーベルバーグ・ドイツニューシネマ・イタリアネオリアリズム、アメリカ西部劇などの素晴らしさを発見した。

医師になってから映画館に行くことが少なくなった。それでもオンコールなどではなければ近くの映画館に行く機会はたまにあるが、昔の様な浴びる程の映画体験はできなくなった。寂しい気がするが、大分は地方であるにも関わらずシネマ5という非常に良質なミニシアターがあるので、今もできるだけ通う様にしている。



2月時点でのコロナウイルスについて思う事

豊後高田市医師会 永松 秀康

みなさん、こんにちは。新しい元号になり、今年は東京オリンピックが開催されます。うきうきした一年かと思いきや、中国での新型コロナウイルスで日本中が何となく不安で、先行き不透明なムードに包まれてきました。この原稿を書き始めたのが、2月22日土曜日です。土曜の午後の診療時間の合間を見て、この原稿を書いています。2月下旬の時点で、恐れていた新型コロナウイルスが福岡、熊本で検出されました。中国への渡航歴がなく、濃厚接触も不明な状況の感染者のようです。大分での感染者がでるのも時間の問題でしょう。まだ他人事としか考えていなかったのですが、診療時間終了間際に1週間以上38度台の発熱が続く11歳の小児が受診しました。他院でのインフルエンザ簡易検査は陰性で、女兒の通う小学校で流行していたマイコプラズマも当院での簡易検査では陰性でした。胸部レントゲン、血液検査も行いましたが肺炎や細菌感染症を疑う所見はみられませんでした。マイコプラズマのLAMP法検査を追加で提出予定とし、37.5度以上が4日以上続いたため、豊後高田市の保健所に連絡をしました。保健所は24時間対応で、専用携帯電話に転送され、当直から保健師へ連絡してくれました。保健所からの回答は、「レントゲンで肺炎がないため、自宅で経過観察」でした。この状況で問題になるのがPCR検査を行うかどうかです。「ダイヤモンドプリンセス号の乗客が下船後PCR陽性」が判明し、世間ではPCR検査についていろいろな意見が出ています。しかし、検査には100%信用できるものではありません。偽陽性、偽陰性の問題があります。PCR検査が99%の感度、特異度の検査であったとしても、今回のコロナウイルスの有病率からすると、20-30名ほどの疑陽性が出る計算のようです。その点をもっとメディアで国や専門家がアピールしないと「PCR神話」が出来上がり、ますます日本中も混乱するのではないのでしょうか？あと、思い切って集団感染の危険性のあるイベントは3月中旬まで中止するぐらいの対策をやってみてはどうでしょう？この文章が医師会雑誌に掲載される4月には、コロナウイルス感染の見通しが立ち、夏にはみんなでオリンピックの熱気に包まれていることを期待して終わりにします。